「知覚」や「表現」における movement quality（質）の重要性――メルロ＝ポンティとラバンを手がかりとして

柿沼美穂（東京工芸大学）

movement はしばしば移動や場所の変化と見なされるが、実際にはそれ以上の内容が含まれる。本発表において明らかにするのは、movement の質、あるいは様態といった、側面的要素が、人間による世界の「意味」の把握に果たす役割についてである。

通常、私たちは世界の意味を、その内容（特に本質と考えられるもの）について捉えていると考える。しかし、同一の内容でも表現の仕方でまったく異なる印象、そして意味を受け取ることは少なくない。特に人間の身体による表現において、その違いは増幅されうる。たとえば同じ絵を模写しても描く人によって異なる作品となるし、同一の楽譜の演奏でも人によって大きな違いが出る。これは舞踊のような movement でも同様である。

メルロ＝ポンティはミショットの実験から、movement の継起のリズムの違いが「鉱物的な、ないしは化石化した世界」や「植物的な生命」あるいは「動物性の感じ」を与える可能性について述べているが、こうした記述は movement の内容の側面的要素、すなわち質的な面、言い換えれば様態の働きを示唆している。これらは「形象や性質の存在を現像してみせるもの」であり、世界をシンボル化し、意味に通じる道を拓くものでもある（M.メルロ＝ポンティ『言語と自然』滝浦静雄・木田元, p.9-13, 1979 年, みすず書房）。つまり、movement の質的な面は、世界や他者の知覚、あるいは表現において、その意味に私たちが到達しようとする際に非常に重要な役割を果たしているのである。

発表者は長い間、このような movement の質的な側面に関する論文を渉猟してきたが、発表者の知る限り、メルロ=ポンティ自身は、このテーマについてそれ以上深く具体的に追究してはいない。同様の研究は S.K.Langer（1895-1985）と Maxine Sheets-Johnstone にあるが、Langer はシンボルとしての舞踊の内容に向かい、Sheets-Johnstone の考察はやや複雑で、具体的な movement と比較しにくい。しかし、Rudolf von Laban（1879-1958）のエフォート（effort）は、シンプルかつシステマティックで movement の質が意味に与えうる影響に関する記述も具体的であり、この研究に有用と思われる。

発表者による以前の発表は、研究の方向性を述べたものや発表者自身の実験と考察に基づいた言語の身体性に関するものである。後者は科学的言語、わざ言語、effort 的言語による身体の反応の違いに焦点をあてたもので、movement の質や様態をテーマとしたものではない。今回は、実際にメルロ＝ポンティによる数少ない movement に関する記述について、それがどのように「意味に通じる道」を拓いているか、ラバンのエフォートを参照しつつ具体的な解説を試みる。